

営農NEWS



水稲育苗の準備にあたって注意すること

気象庁の長期3ヶ月(3~5月)予報(2月25日発表)によりますと、関東甲信地方の平均気温は高い確率60%で、 降水量は平年並または多い確率ともに 40%と予想されています。また、本県の桜の開花予想は、昨年よりは遅いが平 年よりは早く、3月末頃と見込まれています。

これからは日に日に春にむかい、水稲の育苗や田植えの準備などを始める時期となりますが、昔から「苗半作」と言 われ、水稲苗の良し悪しが、良好な生育や収量に大きく影響するとされていますので、生育が揃い、田植後の活着が良 好で、病害虫に侵されていない良苗づくりを目指して、まずは育苗の準備作業を進めてください。

1 資材などの準備

育苗ハウスの清掃や補修、種子、培土、育苗箱(ケミクロンGやイチバンで消毒)、保温資材(太陽シート等)、バ ケツや桶、催芽器や播種機など、育苗に使用するものがそろっているか、動作の確認や調整もしておきましょう。

2 種子消毒と浸種

水稲種子は毎年更新するのが基本です。JAから購入した消毒種子は、種子殺菌剤(対象病害:ばか苗病、いもち 病、ごま葉枯病、もみ枯細菌病、苗立枯細菌病、褐条病)と殺虫剤(対象害虫:イネシンガレセンチュウ)が吹付け 処理されていますので、そのまま浸種作業に入ります。

日	1 2 3 日	4 ~ 12 日		
	種子消毒のための浸種	催芽のための浸種	催芽	播種
	種籾 1kg に水約 40	水の交換を適時、	28~30°Cで	1 箱当り、催
作	3 日間は水の交換をしない	静かに行う	15~20 時間	芽籾で 170~
業	この期間、水温は 10~15℃とし、水温積算温度(水温×日数)で		加温し、ハ	200 g (乾籾
の	100~120℃(<u>水温 10℃で 10~12 日間</u>)を目安にします		ト胸程度に	で 140~160
内			する	g)を目安に
容	「コシヒカリ」、「ひとめぼれ」、「ふくまる」では 120℃(水温 10℃で 12			します
	日間または 15℃で 8 日間)、「ゆめひたち」では 110℃、その他の品種 (飼			
	<u>料用品種を除く</u>) では 100℃が目安です			

注意 催芽のための浸種期間中は、1~2 日おきに水を交換しましょう。酸素の補給とともに、発芽阻害物質の除去な どで重要です。また、ときどきタネ籾を攪拌することにより、水温や酸素吸収の均一化を図りましょう。

※未消毒種子の場合は、塩水選(比重 1.13)で籾を選別し、次のいずれかで種子消毒を行い、浸種や催芽に入ります。

- 1) 温湯消毒:「うるち品種」は、種子を 60℃に保った温湯に 10 分間浸漬処理し、処理後は水中で速やかに冷却し ます。なお、割れ籾が多い場合は、温湯消毒により発芽率の低下する危険性がありますので、避けてください。
- 2)生物農薬(エコホープ、エコホープDJ、タフブロックなど)は、使用方法、使用時期などで適用病害が異なる 場合があります。使用方法、注意点などを十分確認して、適切に処理します。
- 3) 化学農薬(モミガードC・DF[F: 12と3とM1]またはテクリードCフロアブル[F: 3とM1]などとスミチオン 乳剤[I:1B])の規定量液の中で種籾(袋)をゆすって薬液を均一に付着させます。長時間浸漬では、処理中に 1 ~2回攪拌します。防除効果を安定させるため、水温は10~15℃に保ち、処理後は水洗せず、浸種作業に入ります。

3 種子の催芽

<u>28~30℃で 15~20 時間加温し、出芽を揃えるため必ずハト胸状態にします。</u>

この処理中に30℃を超える高温になると、もみ枯細菌病などの病害発生を助長しますので、

十分気をつけて温度の適正管理に努めて下さい。なお、ハウス内や良く日のあたる場所で管理すると、昼間に予想以 上の高温になる場合がありますので、この場合も十分な注意が必要です。

4 育苗培土

JAの水稲用消毒済み培土 (いばらき培土、苗みどり など)を使用しましょう。

未消毒培土の場合は、ナエファイン粉剤[F:U17]、タチガレエースM粉剤[F:32と4]などを土壌混和または播種 時などにナエファインフロアブル、タチガレエースM液剤、ダコレート水和剤[F:1 と M5]などを土壌灌注すると、 一部の病害発生を抑制します。各薬剤(平成31年3月6日現在)の対象病害や使用時期などは異なりますので、必 ず登録内容を確認してください。

農薬使用の際は、必ずラベル及び登録変更に関するチラシ等の記載内容を確認し、飛散に注意して使用して下さい。

※JA全農いばらきホームページでもご覧になれます。



